

## 最近の出来事から

辻 直人

まずは個人的な出来事から綴らせていただくことをお許し願いたい。

私の通う教会のH姉が今壮絶な癌闘病生活を送っている。もう末期の状況で、自分の意思で動くことはほとんど出来ない。ただ病院の一室で、ひたすら治療を受けている。

先日、私は病院にお見舞いに行ってきた。口には酸素マスクを付け、大きく呼吸を続けていたが、話しかけると息を静めて聞いてくれているようだった。時に痛みに顔を歪めながらも、しかし痛みの治まった時にはとても穏やかな顔をする。看護師もその表情が「本当におだやかで珍しい」と話していた。私には、H姉は近付きつつある終わりの時を平安のうちに迎えようとしているように見えた。やはり、そこには信仰による死後の約束があるからであろう。私は、パウロの「わたしは、戦いを立派に戦い抜き、決められた道を走りとおし、信仰を守り抜きました」(テモテⅡ4:7)という言葉思い出した。そして、その姿からひどく考えさせられた。果たして自分が終わりの時を迎える時、このような姿でいられるだろうか、と。

あるいは、こうも言えるだろう。私は日々主から与えられた職分を果たしているのだろうか。H姉の姿を見て、「しっかり研究なさい」と声をかけられた気がした。

今までの私の人生を振り返ってみると、何度も研究生活を止めるべきかどうか、岐路に立たされた経験があった。しかし、不思議にもその時々において、研究の出来る環境が整えられ、今に至っている。今こうして歴史資料館で研究調査員をさせていただいているのも、全く持って自分の意思ではなく、何かそこに備えられていた道であったように思える

のである。今年の3月にはキリ研研究員(当時)の中島耕二氏及び所員の大西晴樹教授と共に『長老・改革教会来日宣教師事典』を刊行させていただけたことは、本当に貴重な経験であったし、かつて学生として在籍していた明治学院の歴史を多少でも明らかにすることが出来たことは、幸いなことであった。今まではとかく日々の生計を立てることに気持ちが向かいがちで、研究者としての自覚がなえてしまうことも時にはあったが、今改めて研究を続けていく思いを確かにした次第である。

現在手掛けている研究テーマの一つは、基督教教育同盟会(現・キリスト教学校教育同盟、以下「教育同盟」と略す)の歴史である。私本来の専攻である日本教育史において、キリスト教教育についてはまだまだ研究されていない部分が多い。特に、1910年に結成され、プロテスタント・キリスト教主義学校の抱える諸問題を協同して話し合う場であった教育同盟は、教育史においてはほとんど扱われてこなかった。しかし、教育同盟の創設はそもそもは井深梶之助の尽力するところが大きいし、その後も田川大吉郎、矢野貫城、村田四郎といった明治学院関係者の活躍は見逃せない。すなわち、教育同盟と明治学院は深い関係にあると言えるのである。今後、歴史資料館所蔵の史料も十分に活用しながら、研究を進めていきたいと考えている。

追記 H 姉はこの原稿を書き終わった後の9月14日、安らかに天に召された。

つじ なおと (歴史資料館研究調査員)

